

---

# ディグノシス

沙堂 瑠々亜

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

ディグノシス

### 【Nコード】

N8041A

### 【作者名】

沙堂 瑠々亞

### 【あらすじ】

『私』は衝動を抑えている。 / 『オレ』は衝動を望んでいる。 / 『自分』は愛しい彼女の希を叶えるために生きている。 / 『ぼく』は、『俺』は、そして『月』は。 / 『彼』をめぐり、様々な登場人物が、それぞれにカタる破片の話。

「お前は其の事は知ってたのじゃないのか？」

私はお前達の一部なんだよ。お前達のずつと奥に居るんだよ？

如何して何もかも駄目になったのか、其れは皆私の所為なんだよ」  
笑い声が、また、震える様に反響した。

「さあ」と、蠅の王は云った。

「お前は他の子の所へ帰るがいい。そして、私等は何もかも忘れようじゃないか」

ウィリアム・ゴールディング 『蠅の王』

ディグノシス 01

彼は括るのが好きだ。人の身体でも、精神でも傷跡でも。

執拗に突付いてくる。初めて会ったときからそうだった。お決まりの嘲った笑みで、此方を咎める。

それらを聞き終わるまで、彼は解放してくれない。

空が微かに明るくなるまで、此方は彼を見下ろすだけだ。

「爛れてるんだ、あんた。だからここまでひりついて離れない。」

……私は「彼」の首を縊りたくなる衝動に駆られる。

両手で首筋をたどり、序所に窪みに力を込め押していく。

彼は何も言わない。噎せる声も吐き出さず、痛がる様子もない。

くたりと折れてしまうのではないか。そう不安に思っ、私はいつも手を離す。

「壊したいんだろう。何もかも崩れてしまえばいいと思ってるんだろう。」

どうして其処で力を入れないのかと、彼は笑う。

代わりに私は爪を立てる。組み敷いた彼を見下ろし、うっすらと傷を付ける。

壊したい？ 私は本当にそう思っている？

違う。私は、そんな暴力的な考えなど、持っていない。

「違うない。」

彼は鋭く言い放つ。睦言とは言いがたいほど、その声は侮蔑に満ちている。

大人しく聞くだけしかない此方をいい事に、考え付くあらゆる非難の言葉を口にする。

「その膿は決してなくならない。あんたはずっと、孕ませて生きて行く。僕と一緒に。」

それは、鳥肌が立つほど愉悦に塗れた、痛くて抜けない細長い棘朝が来る。

残骸に怯え、嘲り笑われるだけの夜が終わる。

そして私はまた、「私」を演じる一日を始めるのだ。

## 01 (後書き)

市原一家シリーズについて

この作品は沙堂 瑠々亜が「シリアスとコメディは繋げられるか」をコンセプトにした四連作のひとつです。

それぞれで話は完結しますが、最終的な核の謎は四作を通して解るものによろと思っっています。

ちなみに各作品のカテゴリ、主人公は以下の通り。

・でびるにお願いっ！……お気楽コメディー。主人公は市原家長男・重かさね。

・アンノウン・ミス・パーカー……シリアスダークな現代異能ファンタジー。主人公は市原家次男・澄すみ。

・近距離恋愛。……ほんわか時々シリアスラブストーリー。主人公は市原家末っ子・志珠あし。

・ディグノシス……一貫性無のナンセンス単発読み物。登場人物も曖昧。

「沙堂四連作」とキーワードに入れると他の作品も出てきます。

「でびるにお願いっ！」と「ディグノシス」が終了次第、「アンノウン・ミス・パーカー」「近距離恋愛」に入る予定です。

私はずっと、声を聞いていた。否、聞かされていた。  
何処に居る？

その声はずっと前から、身体の奥側から響いてきていた。  
どこに、いる？

「彼」は何処に居る？

ディグノシス 02

ちりと灼ける感情を覚えたのは、いつだっただろう。

顔では笑っているのに、どこかが軋んで痛くなる。身体が錆び付いて鈍くなる。

そして必ず声がしてくる。 「彼」の声。

「無駄な、時間だ。」

例えば友達と話をしているとき、「彼」は傍で晒っていた。他人にとつて意味のない話でも、だらだらと並べるだけの話でも、私はうまくやるうとしていたつもりだったのに。

「実に、空虚で、無意味で、無味乾燥な、日々だろう。」  
聞こえない振りをしていた。

誰かから告白された時も、先生から謂れの無い事について咎められた時も、その声は響いていた。

誰かに微笑み返した時も、泣くのを必死に堪えて言い返そうとした時も、確かに響いていた。

「周りが酷く愚かしいものに見えはしないか。 つくり笑いをして、

別個体に合わせて満足か。」

内側から響いてくる声を、必死に殺そうとした。

声に応えてしまった私は、どうなる？ 自分自身で居られるだろうか？

応えてはいけない。予感めいたものが何処かに有ったのに。

ベッドで一人震えているときに、真上からまた声が聞こえて

私は思わず、叫んでしまっていたのだ。

「だがその憎悪と衝動はあなたには隠せない。膿は広がりきって、此方側へと出ようとしている。」

ぞわりと、身体に鳥肌が立った。背中に冷たいものが走って、どうしようもなくなった。

シーツを固く握り、ある箇所へ導く。ユビの泥濘に浸る。

声を聞いてはいけない。返事をしては、いけない。

目の焦点がきかなくなった。暗闇がさらにぼやけていったのは、眸が潤んだからか。それとも、意識が飛ばうとしていたからか。

「僕はあんたが呼び起こした。あんたが孕み温め育てたのが僕だ。

そうだ、あんたは。」

ずっと探していたんだろう。僕を。

解りきった問いだと思った。

私は知っていたから。ずっと探していたから。「彼」の声を、存在を。

「手を伸ばせ。振り返って僕の名を呼べ。」

あなたの名は。私のどす黒いものが目覚めさせた、『名乗る価値もないもの』。

#Numberless “甘く広がるその名は妄想”

「いいや、僕に名乗る価値など無い。それを証拠に、僕は誰からも存在理由を聞かれない。」

何故なら僕は、一人一人に遍く知られている存在だから。

一部であり奥にあり、そしてまた破棄と追憶を与える存在だから。

┌

ディグノシス      Numberless      “甘く広がるその名は妄想”

「周ちゃん、佳子<sup>かこ</sup>ね、聞いておきたいの」

未だにオレのことをちゃん付けで呼ぶ幼なじみは、顔を上げた。

「かこの身体でも、ちゃんと欲情する」

誘ってるんだろ。応えてやれよ。……アタマの中で声が響く。

手を伸ばせば届く肌、掴める膨らみ、細い腰骨、……舌で舐めたら、彼女はどんな表情を見せるだろう。

どうしてこんな状況になってるんだ？

彼女は近所の幼なじみで、やめろって言っても ちゃん付けで呼んで来て、

おかずのおすそ分けとっては家に上がりこんできて、

今日だって明日のテストで教えて欲しいことがあるからって友達とやって来て、二階に上がって、それで急に彼女が

「聞いてるんだよ……こたえて」

オレの身体に触って、真面目に聞いてきたのだ。

ばか言っな、どこかで聞いたお決まりの台詞を吐こうと思った。

もっと自分を大切にしろよ、そうも言いたかった。けれど出てこ

ない。

切実で、邪推のない、純な望を、拒否できなかった。オレ自身の希を、無いものになんて出来なかった。

「ソレの言うことは本心だよ。なぜ聞けない。」

別の声がした。「彼」は、すぐ傍らに立ってオレの肩に手を乗せていた。

「希を識つて模倣しただけの別個体だ。現実がいかに堅固で難儀か、知っているだろう。」

……お前は……

知っている。オレはこいつを知っている。

でも一体いつから？ ただ晒うだけの存在を、オレは見たことがあるのか？

問えば必ず返ってくる答え。だが、オレは何も口に出すことが出来なかった。

「女は醜いが賢い。云ったらどうなるか把握している生きモノだから。」

彼女は「幼なじみ」のオレにこんなことは言ってこない。

みすみす関係を壊すような真似はしない。近くに居たオレが良く知ってることじゃないか。

それなのに、どこまでも彼女のような声で……オレを窺う表情をして……

「周ちゃん。かこ、苦しいよ。止めて……止めて……」

彼女が切なそうに懇願する。そんな目で見るなよ。そんな風に震えるなよ。

「だが男は頭が切れるが醜悪なイキモノだ、」

……黙れよ。糞が、それ以上オレに構うな。

もうどうだっていい。目の前の、口をひくひくさせて潤んだ眸を向けてくる柔らかい生き物しか、今のオレには映らない。

貪り喰らう、とはこういふことかと感じた。

「そつやって、後で自責の念に囚われることも解らないのだから。  
嘲る声など聞かない振りをした。  
歡喜の渦に巻かれた、気がした。」

何もかもが、失せた。

「なんか日傘って変なのしかないと思わない？ いかにも日傘です、  
ってカンジの」

意味のない会話が長く続けられるのは、頷きと微笑みがあるから  
だ。

「この間のアレはキモかった。一生来んなって」

どうでもいい話が打ち切られないのは、その頷きと微笑みに話し  
手が安心するからだ。

「全然テスト勉強してない！。もー超ヤバいかも」

一様に頷いて、一様に返して、一様に次を促す。 適当に意見を言  
う。

結局は同意しか望まない意見を求められて、冗長な話を膨らませ  
る。

「なんかさ、こういう時 もうひとりの自分が居たらいいなと思  
うんだよねー」

「出たー乙女チック発言。そんなコト言ってつとオトコにヒかれる  
よ？」

「違っつて！ ほら都市伝説でもよくあるじゃん」

この頃の私は、本当にどうかしている。

怯えているのだ。漠然としか浮かばなかった考えが、判然とし始  
めたから。

恐れていたもののはずが、今はあるひとつの答えを求めている。

もし、ここであれを口にしてしまえば、どうなるのか。

既に知っている。きつと周りの調和は瓦解するだろう。空気が白  
々しいものになってしまうだろう。

無意味で、無味乾燥で、無駄な時間だと知らしめてしまうのだ。

「なんていうんだっけあれ、『ドッペル……』」

それなのに私は、いつまで自分を抑えていることが出来るのか、

不安になつて仕方ない。

唆されたあの日、「彼」は、興味深いものを捕らえるのは理に適うと囁いた。

私たちが言うところの此れが『意志』だと。あるいは深淵へ回帰させようとする『意思』なのだ。

ふと考えてしまう。

彼の意志は、私を破滅へ導く為だけに生まれたものだろうか。

あるいは、私がそう望んだから出てきた意思なのだろうか。

結局、これは誰の身体で誰の思考なのだろうか。

「そういえばさ、最近こちら辺で行方不明者が多くなつてゐるのって知つてる？」

せいぜい足掻いて見せろ、理性が何処まで保つのか、と嗤い声は訝する。

そうして彼は私を抉り、どこまでも貫き、非情な言葉を浴びせ続ける。

「行方不明になつた日と、見つかった死体との時間がかみ合わない事件が多いんだって」

「それ聞いた！ その日は一緒に仕事してました、とかコワイ証言あるやつでしょ」

「え、じゃあ 死んでるのに自分がもう一人居たってこと？」

「そうそう、かわりにテスト受けてくれてたりしてね」

「あはは それいい！」

笑うたび、しずかに、神経が削られていく。

しずかに。

しずかに。

「だからさあ、ひよつとしたらもう まわりの誰かもドツペルゲンガーってヤツに、……」

どこかで、線が切れていく。

ぷつりと。

途切れて。

笑えなくなる、気がしていく。

「ねえ、そういえばその首筋くびの傷はどうしたの？」

世界よ、これ以上私を失望させないで。

二人きりになって誰かに呼び止められたのは、初めてじゃなかった。

「最初見たときから、いいなって思ってた」

教室を出て行こうとしたところで声を掛けられた。クラスメイトが切羽詰った顔になっていた。

「急にこんなこと言われて、驚いてるかもしれないけど、……」

私が真顔になってしまったのは、驚いたからじゃない。

相手を思い、同調してしまったからじゃない。

一目惚れなんて、信じないだけ。

うわべだけしか見えてない、私の中の穢れた場所まで見えてない、知ったら幻滅するだけの木偶が何を言うの。

ディグノシス 04

記憶が途切れては繋がることがある。

自分がどうしていたか。自分の身体をどうしたのか。解りにくくなってきた。

今だって、私は相手に何を言ったのだろう。

どうして私は、乱れた服で、ひとり教室に伏しているのだろう。

「興味深い個体も居るものだな。約定は既に締結してあるというのに。」

人の影はない。おぼろげな意識では、声の主が何処に居るのかも判断できなかった。

ただいつものあの声だけが、混濁した意識の中ではっきりと響いてくる。

「あれも、あんたを見てはいない。誰かしら、何も見ていない。それでもあんたはまだ信じるのだろう。誤魔化された本質に依存しようとするのだろう。」

此方の性分を分析し、見縊る「彼」の声がぴったりと耳に張り付く。

いつだって後悔しているはずだった。

あの夜、振り返って手を伸ばしたりしなければ。

すべてかなぐり捨ててしまうことを抑えていたら。私は私でいられたかもしれない。

笑うことに疑問を抱いても、無意味で無駄な日々だと気が付いても、

知らないふりを続けて、くだらない会話に相槌を打って、嘘の笑顔を見せていたかもしれない。

「いつでも言い聞かせているだろう。あんたが縊るべきものは、僕だ。」

だけれど、「彼」以外に誰が居るだろう。

醜い感情をひた隠し、幻滅されることを怖れ、欺いている自分を、誰が要るといっだろう。

非情な言葉を囁き続け、身も心も八つ裂きにし、

理性が飛ぶほど深く食い込ませてきた彼以外に、私がかからの真実を見せる相手は居ないのだ。

「絶望し、理性を失い、外殻を膿で浸すことを望んだのは、あなたの筈だ。」

彼の名前は何と叫んだか。

此方からの要求に応じてくれたこんな時ですら、私は彼の名を呼べない。

いや、この感情を持ち合わせている私こそ、名乗る価値も無い物なのかも、知れなかった。

Numberless “君に誓う戯言と囁言”

今宵 手始めにあれを狩ってやろう。

「彼」に差を見せ付けるために。愛しい彼女の願いを叶えるために。

笑いが止まらない。そうだ 今の自分はなんだって できてしま

う。  
「テストが終わって余程嬉しいのか。こっちはこれから採点地獄だ  
よ」

その表情を見ていた部活の顧問は 風情に似合うため息をつく。  
知らないのだろう。自分が何故こんな清々しい気持になっている  
のか。

「こんな日に手伝わせてしまつて済まなかった。気をつけて帰りな  
さい。……九茂」

”  
ディグノシス Numberless “君に誓う戯言と囁言”

目を逸らされるのには慣れていた。

煙草を押し付けられたような癍痕が 顔の目立つ場所にあるから  
だ。

地味に生まれた自分が 人の態度に過敏になってしまつのは自然  
の流れたつた。

腫れ物を避けるが如く 穢れた場所を遠ざけるが如く 誰もか  
も目を逸らす。

ただ 出会つた彼女は 何の躊躇いも無く撫でたのだ。  
包み込むような優しい手が 頬に温もりとして残つた。

初めてだった。いとおしかった。

触れることが出来たらどんなにいいだろうと思った。

彼女は 自分と違って 水のように透明で 淀みなどひとつもないから。

「いいや、これは誰よりも救済と言う名の崩壊を渴望している。誰よりも臆んで穢れた個体だ。」

呼び掛けられて思考が止まった。

正気に戻る。自分が組み敷いていたのは…彼女の筈だ……

いつから虚仮にされていたのだろう。お笑いだっただ…確かに彼女は顔を赤らめて

だけれどにつこりと微笑んでくれて 自然な流れでそのままふたりとも床に崩れたはずなのに。

彼女は いつもと穏やかな笑みをしながら…瞳孔が開ききったままの眸で此方を見つめている。

思わず呼んだ。それが名前の筈 と言うと「彼」は返した。

「あなたがこれと呼んでいる名になど、興味はない。本当の名は、名乗る価値も無いモノだから。」

……これは…何だろう？

彼女じゃない。途端に冷や汗が吹き出た。手を離してのけぞる。

少なくともこれは彼女じゃない。まったく別の 本能的に危機を感じる 異質なもの……

「醜い物同士が、自らの醜さを露呈することを厭い、相手の醜さに失望する。」

慰め合えるのは、相手を自分より下だと悟ってしまった時だけというわけか。」

くくと喉を鳴らす。彼の問いに自分は答えられなかった。

近付いてくる 黒影。へたり込んで動かない此方の前に 手が伸びてくる。

広げた掌が 誘う深淵の如く目に映る

「ならば希を模倣したものに価値はあるのか。」

模倣に示唆された時、傍観者は自分を総てから消去したいと願うのか。

あるいは総てを拒絶し続けるのか。生まれたばかりの僕は知りた  
い。」

希。

彼女の 希。自分の 希求するもの。

どうすれば彼女が笑ってくれるのか 彼は知っているのだろうか。  
自分が彼女でなければ駄目なように……彼女は彼でなければ不可  
ないのだろうか。

嫌だ。彼女以外は邪魔なのだ。

答えなんて要らない。……要らない。

“その希を叶えたら あの子はわたしに笑ってくれるの。”

自分の希求するもののために あの子の希を叶える。

問うたものが如何に陳腐であるかを知っていた。それゆえに 訊  
いた。

真つ暗な世界が解けた。

見上げると彼は 唇を曲げて その絶対的な態度を見せ付けてい  
た。

no·lies “憧憬破綻”

最終幕・場面5

(BGM無。上映用スクリーン有り。場所、空間を指定する背景・小道具無し。)

開幕

スポットライトが舞台中央の床を照らすが、誰も居ない間。

舞台袖右から傭兵が登場。スポットライトを追加。

傭兵 俺は作られた機械だ。痛む心、悼む心、笑える心など何もない。

死んだ。俺をつくった人間はとうに死に、俺に命じた人間もとうに

け。あるのは人を手にかけてこの手だけ、虚無をさまよう体だけ。

「 ノ ゾ ミ は ? 」

(舞台奥のスクリーンに、サブリミナルの映像が映り、一文が表示される。)

傭兵 俺は、完璧な心が欲しい。いたみを分かち合い、人と笑える感情が欲しい。

舞台袖左から青年が登場。スポットライトを追加。

青年 オイラは田舎出の百姓だ。下働きで、大百姓にヘコヘコするしか生きてけねえ。

ディグノシス

せめてオイラに脳みそがあれば、どうしたらうまくやれるか考えられんだ。

自分ひとりで食ってけんだ。

『 ノ ゾ ミ は ? 』

(舞台奥のスクリーンに、サブリミナル映像が映る。)

青年 オイラは脳みそが欲しい。いろいろ考えられて、行動できるアタマが欲しい。

舞台下、観客席から獣人が登場。スポットライト追加。

獣人 ぼくは獣人の一族だ。誇り高き種族の末裔なのに、臆病者と笑われてる。

狩は逃げればかりで、いつだって怖くて怯えてばかり。せめてひるまない強さがあれば。ぼくも立ち向かっていける、気がしたんだ。

『 ノ ゾ ミ は ? 』

(舞台奥のスクリーンに、サブリミナル映像が映る。文字がゆっくりしたスピードで点滅。)

獣人 ぼくは勇気が欲しい。一族に恥じない、勇敢になれる力が欲しい。

照明、一旦暗転。

間を置き、スポットライトを中央・右・左・下の順に一斉に当てる。

中央のライトを当てた時、少女が登場している。  
後ろ向きに立つ少女が、観客側に振り向く。

少女 私は他所から来た女の子。

此処に来なければ、叔父さんと叔母さんの農場ですつとお  
手伝いをしていたわ。

でも此処に来なければ、私はきっと解らなかった。大切な  
ものを知らないままだった。

『ノゾミは？』

(文字がゆっくり点滅する。)

少女 あなたは何処にも居ないのね。

希を叶えてくれる魔法使いなんて、何処にも居やしないの  
ね。

『ノゾミ』 『は』 『？』

(断続的に映し出される文字。)

中略

スクリーンに映像(音声無)が流れる。

登場人物、科白を言う時に一歩ずつ前へ。

傭兵 そう、傭兵は、叶わぬ夢を見ていた。

青年 青年の言葉は、うわ言に過ぎなかった。

獣人 獣人のねがいはただの憧れ、依存でしかなかった。

少女 少女は満たされた時に戻りたいだけだった。

ディグノシス

傭兵 希は妄想。  
青年 希は回顧。  
獣人 希は憧憬。  
少女 破綻するもの。

映像が断続的になり、最後は黒い画面で止まる。  
以下、科白時、一人ずつ手を宙に上げる。

傭兵 それでも、存在し続ける限り。  
青年 一つの個体である限り。  
獣人 醜くても、足掻いている。  
少女 わたしたちは、飽くなき希求を、その帰趨<sup>ききう</sup>を。

全員 望んでいる。

幕 黒い画面をバックに、全員が佇む。

\*\*\*\*\*

『憧憬破綻』

都内某公立学校演劇部 生徒作脚本より抜粋

教室の一番後ろから、私は教室という 切り離され孤立した一空間を見回す。

放課後の今、一空間は様々な声が飛び交っていた。

総合で勝った方が吟だこゴチな。お疲れ。部活頑張ってるね。地学今回いい線いくかも。

三日前に受けて、返ってきた試験の答案を交換し合う者、

帰りの挨拶もそこそこに 部活の支度をする者、

採点が終わらず返ってこなかった教科の点数に対して、自信を口にする者……。

傍観者になればいい。死者のように、創造主のように、俯瞰していればいい。

そうすれば私は何も考えなくて済むから。思考も闇に沈み込ませてしまえるから。

いつものように私は周りに帰りの挨拶をする。

いつものように周りは私に挨拶を返してくる。

ただ ひとりだけ。この間と同じく、ある男子生徒だけが怪訝な顔で此方を見ていた。

ディグノシス 05

「あつ。お久しぶりです」

生徒玄関に続く廊下を歩く途中で、呼び止められた。委員会で顔を合わせている後輩だった。

何でもないことを二、三話す。これから部活だと言つと、後輩も自身の所属する部の近況を喋り始めた。

「再来週に公演があるんですよ。コメディの創作劇で。同じ一年の子が主役取って。ちょっとそれはないよなって思うんですけどね……」

却って親しい人間には言わないであろうことまで、言葉の端から洩れていた。

挨拶をして別れる。たどり着いた生徒玄関は、電気もついておらず、西日が入らないせいで薄暗かった。

靴箱を取り出そうとして、もうひとり横で同じ動作をしている影に気が付いた。

誰かと思えば、先ほど怪訝な顔で此方を見ていた男子だ。

私が後輩と話をしているうちに、いつのまにか支度を済ませて教室を出ていたらしい。

相手が此方の姿に気付く。部活かと声を掛けられたので、そっちは直で帰りなのかと適当に繋げた。

「今日の体育、女子はミギが代理だったんだって。ねちっこかっただろ」

会話をしてみると、この生徒が誰に対しても平等の態度を取っていることに感心する。

偽善的な振る舞いではない。あるいは、それを感じさせないほどの演技者か、何も考えていないか。

「そっだ、参考にいいか？ 亀煎餅と歌舞伎揚げ煎餅ってどっちがいいと思う」

……でなければこんな突拍子もない質問はしてこないだろう。

いつものように茶化してみせると、面白い返答をしてくるものだから、つられて笑ってしまった。

相手が言い出したのは、別段変わりなく問いかけた会話の延長だった。

「なあ、それよりどうしたんだ、そいつ」

意図のない言葉だ。

もし、これが折を見計らって計算で訊いてきたのだとしたら相手は大層頭の切れる人物、ということになる。

そうでなければ、私はこんな確信を突かれた表情を見せやしない。

……え？

余裕なく聞き返した此方に、生徒は違う方向を見て言った。

「だから、隣にいる奴。弟か？ ……にしては、似てないし」

思えばその生徒は、私と会話するとき、いつも目があらぬ方向に向いていた。

何かを凝視し続けている、というべきだろうか。

……なにを、見ている？

平静を装ったつもりだったが、背中で嫌な汗がつつ、と垂れていくのが分かった。

生徒はもう一度私の隣に視線を合わせるが、此方に戻す。

「なんか周りの奴も気にしてないから、いいんだけどさ。これから部活なんだから。行つてスーパーテクでも見せてやれよ。じゃあな」生徒の目線に居たもの。

喪服の如き黒衣の正装。髪も目も黒いのに、反して肌は病的なまでに白い少年。

傍らに居て、此方をいつも見下げる存在。

「彼」は生徒玄関を出ていった生徒の後ろ姿をじっと見ながら、不敵な笑みを浮かべた。

「接触してきたか。妙な手を使ってくるものだな……あれの主は。」力を込めてしまえば折れてしまいそうな体軀は、遠くから見ると、全身を黒づくめにした鳥に思えた。

不吉だと忌み嫌われながらも、空を翔る姿は気高く、獯猛で、鋭

く抉ってくる　漆黒の鳥。

「主の意見を聞かなければ不可ないな。汚穢に塗れた罪科の我が主、あんたは如何したい。」

彼は私に触れる。体温を感じない指先が、耳から頬、首筋をなぞっていった。

希ならある。どんな形であつてもいい、空虚からの解放。

絶望。嫉妬。欲望、怠惰、嘆息、悲観、自虐　数え切れない昏き思考からの　脱却。

白黒の世界に億千万の色が塗られたように、窓を開けた途端光芒が広がるように、

私の世界は開けていったのだ。

目の前の　扇動する黒だけを、いっそう際立たせて。

開けておいたままの窓から、奇妙な月が見えた。  
闇に喰われた残骸のように、細長く 線上になった月だ。  
カーテンがたなびく。風が身体の汗を撫でていった。  
初夏でも焼けている私の肌は、色白だとは言いがたい。  
けれど、暗闇に慣れた目で見てみれば、白く浮かび上がってくる  
から不思議だ。

……傍らの彼は何処へ行ったのか。

「彼」の肌の色を思い出す。

透き通るほどに色は白く。噎せ返るほどに髪は黒く。

少女のように細い首筋。骨張った関節、それからすっと伸びた腕  
を。

中性的ではあるが、同質ではない異性の芽が仄見えた。

色素が消えうせてしまった肌と不均等で、今にも、壊してしま  
たくなるような。

けれど、被虐待の対象になり得るほどの色気を持つ彼は、反して  
嗜虐的だった。

締め上げて、苦痛に歪めたいと思えば思うほど、彼はその全てを  
私に返した。

主である私の奥底にあるものを、彼は幾度となく掘り返した。

沈めたものを拾い上げては、具現化して此方に見せた。

希はこれなのかと問いかけた。誰よりも瑣末で不相応なねがいだ  
と嘲笑した。

受け入れてしまったのは、いつからなのだろう。

目を閉じながら、一時前のことも反芻していく。薄れ行く記憶の  
糸をぼんやりとたどる。

ほんの僅かな月明かりに晒された、病的なまでに色白い肌が 脳裏に浮かぶ。

今日の彼は何か別の事に囚われているようだった。

いつもなら朝方まで私を拘束していたのに、何故今晚に限って、途中で解放したのか。

私は嘲られ苦痛に歪められていたはずだ。葛藤と苦悩に苛まれた痛みなら確かに在る。

蔓延る闇は、深く根付いて剥がれない。受け入れたはずの昏き世界にも、まだ空虚が残っている。

空虚はまだ消えない。完全に闇を受け入れていない。

しかし今私の心に残っているのは痛みではない。清涼感にも達成感にも似た甘美な感情なのだ。

これは、なに。彼が殖え付けたものなの。それとも私が生んだ『意思』なの。

問い掛けるが、返答は無い。

まどろむ意識を感じながら、ずるずると落ちていった。

ふかく、光に蕩けるように。

ふかく、闇に沈むように。

「呼んでいる。けれど僕とこれとは引き剥がせない。僕はまだ見極めていない。」

果てる時に聞いた 彼の呟きなど忘れて 私は眠る。

Numberless “常識で測れないぼくは子供”

ぼくは蹴られていた。

塾が入っているビルの、屋上へ続く踊り場で。

数人の生徒が群がり、ぼくを円の中心にして次々と腹を蹴っている。

土曜の昼前は自習時間に充てられていて、夜より却って人が少ない。

ちよつと言い掛かりをつけてこんな暗がりに入れ込む奴ら

昼間は親や教師に優等生の仮面を被った奴らにとって、ひ弱な体型のぼくは格好の餌食なのだ。

「にしても、ボールみたいによく跳ねんなあコイツ」

「助けてって喚いてみるよ。言いたきゃ言えよホラア」  
リミッターが外れていく。

胸の内から、鬱積したものが溢れていこうとする。

必死に抑えた。こいつらは不味い。こいつらは下衆だ。肉以下の塊、腐れきった臍物の集まりだ。

まだその時ではない。まだその時ではない。

「クズなヤツは！ 一生！ クズなままなんだよ！

オマエがココで息してんのもメシ食ってんのも全部ムダでジャマで地球に優しくねえんだよ！

エコロジストになってみるよ！ あ？ こう言わなきゃ解んねえか？

消えちまえよ。オマエみてえなクズは、1ナノも残さず消えちまえ！！」

顔には傷を作らせない奴が、珍しくシャウトして、頬にがつんと一発入れてきた後だった。

がたん、と物音がして、見張り役の生徒が動揺する声を出した。

「お、おい、タカちゃん、あっちから誰か人が……」

「構わねえよ どうせ大学生の講師だろ！？あんなヤツら親に言え  
ばすぐクビにできるって」

言い終わるが早いかな、暗がりの踊り場に足音響かせてやって  
来たのは、男女の二人組。

「残念でした！ あたしたちは生徒だからクビになんかできないわ  
よっ」

「……小学生のケンカに入る意味あるんすかあ」

「あ・さ・が・や・くんっ」

「はいはいわかったすよわかりました。 というわけで、とつと  
と退散しやがっちゃってください」

声からして勝気そうな女子と、乗り気じゃないカルいお調子者の  
男子の声。

朦朧とした意識の中で、逃げ出すあいつらの姿が見えた。

それから、ぐったりしたぼくを見て 慌てた誰か、差し伸べられ  
た手

「ちよっ、ちよっと大丈夫!？」

ああ。これは肉だ。

目の前にいる生物は、ぼくと違って柔らかい肉がついている。

その健康そうな肌を切り開いたら、渦巻いた薄桃色のモツが並ん  
でいるんだろっ。

想像する。服ごと切り開くぼく。一閃切り裂いた傷口に手を突っ  
込むぼく。

押し開き、その中にあるものを掴んで、引き摺り出して、異臭を  
嗅ぎ分け、滴り落ちるのを眺めた後にしゃぶるぼく。

……最高だ。どんなにかぼくは恍惚と至福に酔い痴れることがで  
きるだろっ。

「ねえ阿佐ヶ谷くん、このコ笑ってる……」

よかった。安心したんだね つゆ知らずの安堵の音が、ぼくの  
耳に残った。

ディグノシス                      Numberless                      “常識で測れないば  
くは子供”

「おーい。そのクズ呼ばわりされてた小学生。生きてんすかあ」  
煙い。嫌悪感を抱く噎せる薫りに、嫌でも目を開けざるを得な  
った。

ぼんやりした景色に焦点が合っていく。煙いと思っただのは、頭上  
で煙草を吸われていたからだっただけ。

ガキ呼ばわりしても、アンタだって二つぐらいしか変わらない中  
坊だろ…

居残った不良男子学生に言ってやりたいけれど、ぼんやりしてい  
て口がうまく回らない。

「市原サンに感謝するんすね。用があつたみたいだから、帰ら  
せましたけど」

声を張り上げていたさっきの女子らしき名を呼ぶと、相手はどっ  
かりとその場に足を投げ出して座った。

頭の中で事の顛末を結論付ける。ほんの僅かな時間、ぼくは気絶  
してしまっていたのだらう。

「あ、コレ吸ってんのは内密に。市原サンとは塾だけの付き合いだ  
もんで、こんなトコ見せたらヒかれるっしょ」

けらけらとおどけてみせる。遠慮もなしに煙を吐き出すものだけ  
ら、副流煙がもろに染み込んでいきそうな気がした。

煙は嫌いだ。そんなに煙に巻かれたいのなら、練炭と一緒に焚け  
ばいい。

思わずぼくは仏頂面になる。目が覚めた以上、居合わせる必要も  
ないと感じ、立ち上がった。

「次は市原サンを脳内で肉にするつもりっすか？」  
唐突に。ぼくの背中に向かって、そいつは宣った。

「あんな標的見るような力才で笑われちゃ……バレバレっすよ。脳内で人を手に掛けるような類友だって」

次第に。振り返ってしまつた身体が、小刻みに揺れた。

凶星なことを言われたからじゃない 奴の顔をはつきり見てしまつたからだ。

類友、そんな表現でぼくを評した奴は、目だけで威圧する歪な表情をしていた。

「どっかで変なのに会つてたらゼヒ教えてほしいんすけど。」

黒い服に黒い髪に黒い目、肌は白い…… 13、14くらいの細い成りで」

相手は煙草を挟んだ指を軽く揺らして、灰を飛ばす。

火の粉の灰が、風に乗ってぼくの皮膚に張り付いた。

熱い。それなのに、寒気がする。なんだ？ この目の前の威圧感  
は。

「『名乗る価値もないもの』。勝手にそう言い出した『彼』のこと  
っすよ……」

知らない。「彼」？ 『名乗る価値もないもの』？

なにを言ってるのだろう……ぼくはただ、脳内で愉しんでるだけ  
じゃないか。

なにを言わんとしてるのだろう……目の前の、こいつは！

ぼくは、カタカタと震えながら、首を横に振った。精一杯の意思  
表示だつた。

不良男子は、目を丸くする。そして、煙草を爪弾いて、階段に放  
つた。

「なアんだあ 違つたんすか。脳内妄想の激しい輩だから、もし  
かしてと思つたのになあ」

カタカタと震えていたのは、肩を上下させて笑う相手も同じだつ  
た。

笑いを、抑えている素振りだつた。

「ならもう帰っていいっすよ。……そうだ、もし今後そいつに出会

うことがあるんなら、コツチの名前でも出しておいてもらえます？」

喉が灼けるように痛くて、剥がれない。搾り出すような肯定の聲が、自分の口から洩れた。

「阿佐ヶ谷 朋生。ツキが二つ生まれる、そう書いて トモウ」  
ぼくは、走りだした。螺子が飛んでキレた嬌声など無視して、階段を駆け下りた。

灰を貼りつかせていた頬の痕が 少しでも痛んだ。

どうやって家までたどり着いたのかは、覚えていない。

ばん、と相手の頬を張り倒していた。

怒りに任せての感情でもなく、安っぽい正義感を振りかざしたわけでもない。

私は、助けた。

あの目から逃れられるよう、相手の意識を促したのだ。

「それで諫めとるつもりか」

駄目だ。これ以上、言わないで。

「まさか、自分の兄軽んじるなどが、そう言うんか」

あれが見ている。脆い有機体であるひとを、知ろうとしている。

核を護るために笑い、踏み込まれないために殻を張る個体を、知り尽くそうとしている。

ほんとうは知ってほしくて、曝け出たくて、心の中で叫んでいる私たちを、嘲笑っている。

貶めようとする。どうとでも出来るから。自らの意思を確かめたいから。

意志を持つとうとしているから。

なんのために？

理由など、問う必要があるだろうか。

彼らを解しては、不可ない。

ディグノシス 07

ディグノシス

赤黒い夕焼けが闇へ移り変わっていく様を、久しぶりに見た気がした。

朝焼けと夕焼けを同じくらい見ていたはずなのに、夕方の太陽は

印象に残っていない。

今までの私は、空が赤黒く変色していくのが耐えられなかっただけなのだろう。

侵食してしまう闇を、心から忌んでいたのだ。

「……あんたも今帰りなん」

此方の地方では聞きなれないアクセントで声を掛けられ、振り返る。

堂々とジャージで帰ろうとしている男子テニス部の先輩が居た。

転校して随分経つらしいのに、周りに同化するのが嫌なのか故郷の訛語を貫き通している人だ。

後ろから突然低く声を掛けられたせいもあって、私は少し驚いた顔になってしまった。

人気のない放課後、校門の前でひとり空を見上げている此方を訝しく思ったのだろうか。

「警戒せんでもええやろが」

顔を見上げると、ふいと目線を外される。そのまま何も言わずに歩き出してしまった。

一方的に会話を打ち切られたことに慌て、小走りになって追いかける。

この先輩は、女子テニス部でもクールで関白だとか思慮深い先輩だとかで有名だった。

……物は言いよう、とはよく言ったものだ。

気紛れに声を掛け、自分で会話を打ち切って、臍を曲げてさっさと帰る。

気分屋で思考が掴めない人間だと解ったのは、女子部と男子部の折衝で顔を合わせるようになった。ここ最近のことだ。

だから 住宅街に差し掛かったとき、向こうが足を止めて此方を見たのは意外だった。

「オレン家の話でも、女子部で回ったんか」

答えに窮してしまった。こつこつあつけらんかに言われてしまうと、

なんと返せばよいのか解らなくなる。

そして思い当たった。先ほど校門で此方が驚いた理由だと勘違いされているのではないか。

私があんな反応をしたのは、突然声を掛けられたことであつたのだが

本人にして見ればそのことで引かれてしまったと考えたのだろう。逡巡したが、噂が回ってきたことは事実だったので、頷いた。

「ふうん」細い目で一瞥され、またお構いなしに歩き出されてしまふ。

「別に大したモンでもないで。昨日一昨日 家族総出で大わらわになつただけや」

その眠たそうな目が、どこか翳りを含んでいるように見えたのは気のせいだろうか。

「電話が深夜に掛かて 慌てて病院行つたら、アニキが搬送されてたん」

大袈裟に頭をかしかしとかいて、すたすたと歩く。

歩幅を合わせようとしないから、此方が早歩きになるしかなかつた。

女子部の先輩がこぞつて言うクールな関白ではない。恐らく何も考えていないのだろう。

「腿の肉が抉れとつた」

何も考えていないから、こんなさばさばと口から出てくるのだ。

「ナイフ振り回して自分で刺したらしくてな。本人はドツペルナントカの本体見たとかぬかしとる」

ドツペル……ゲンガー？

引つ掛かるものを感じた。この間の昼休み、クラスメイトが話していたからだろうか。

「けつたいな女に『鍵』掛けれるとか妄言繰りかやして……安定剤ばつか打たれとる状態ねや」

眠そうな目が、遠くを見ていた。速度を合わせる此方に向けよう

ともしなかった。

「ホンマ、あないな愚図どないしようもない」  
ぞわりと 鳥肌が立った。

「犯罪スレスレのことやらかして親困らせとったくせに、今度はヒッキーになて親困らせやがて」

先輩が苦虫を噛みつぶしたような顔になっていた。

憎悪の感情。積もり積もった内面の埃。隠そうともしなかった。

知っている。この感覚。内側からねっとりまとわりついてくる、この悪寒。

核を護る。殻を張る。それなのに内側から壊され、穢されていく。それが本来の己の意思かのように、打ち消されていく。

脆い。本当に崩れやすい有機体だ。少し捻じ曲げてしまえば、簡単に糸を断ち切ってしまう個体だ。

だからこそ ひととは、足掻いて、もがいて、その意識から逃れようとしているのに。

「……あないな社会のゴミ、いつそのこと 本体だか変な女だかにやられたらよかったんや」

私だけでいい。あれが蠢くのは、私の内面だけでいい。

だから、これ以上唆すようなことを言わないで。

「彼」は、近くに居る。

住宅街に、乾いた音が響いた。

「……安い正義感やな」

眉間に皺を寄せたまま、細い目で睨まれた。叩いた相手の左頬が赤くなっていた。

手を出したのが癢に障ったらしい。

そうだろう、この人は私に対して兄への憎悪を垣間見せてしまったのだから。

唐突に顔を叩けば、正義感や正論で一方的に非難された、としか思えない。

それでも、私は先輩の意識を此方に向けさせる必要があった。

「アニキが今まで仕出かしてきたコト知つとるんか？ あの腐れが、何やらかして病院入れられたか分かつとるんか？」

これは、嘆いているのか。今まで両親の目が自分に行き届かなかったことに。

直感で感じた。叩いたせいで、此方の指先もぴりぴりと痺れが残っている。

そしてこれの兄もまた、疼いているとしたら。両親に見放された存在であると信じていたら。

先輩を取り巻いている渦の名が解る。内面で燻っていた物の名を言える。

憎悪というには未熟で、だか嫌悪というよりは確かにどす黒く、粘り気を持った静脈血のような存在。

指先が微かに震え、電流の痛みが走る。

どこかで私は先輩のような相手に出会ったことがなかったか。外見では想像できない膿の概観を眺めたことがなかったか。

幾度も　そう、幾度も。

…例えばある少女は、幼なじみに対して、感謝の意を表したいと

願っていた。

とあるきっかけから少女は幼なじみを失った。

…ある少年は幼なじみに対して特別な感情を抱いていた。

とあるきっかけで少年は少女を貪った。

…ある少女は私を好きだと言った。

とあるきっかけから少女は闇夜を奔る力を得てしまった。

すべてのきっかけを与えたのが、誰であるのか。

その場面にいつも傍らとして居たのが、誰であるのか。

どうして忘れていた？

救済と言う名の崩壊を、私は確かに渴望していた。

空虚からの解放、昏き思考からの脱却、抗いの先のあるものが知りたかった。

けれど、私は、他人の日常を非ざるものに変えてまで、知りたくはなかった。

ついてきたのは私だ。彼のすることを、見てきたのは私だ。

私だけでいい。蠢き、蝕み、あの感情を増幅されてしまうのは、私の内面だけでいい。

「彼」にこれ以上、「葦」の本質を識らしめては不可ないのだ。

……居るんでしょう？ この人まで暴くのはやめて。

街灯の明かりが、虫を喰らってジジと鳴る。

しかし彼の声は聞こえなかった。

今まで私の傍らに居て、あれほどまでに罵倒していたあの声が、ぴたりと止んでいた。

私はあたりを見回す。黒い外套、黒い髪、黒い瞳、反して肌の色は血色のない白

少年の姿をして此方を冷え切った目で見つめていた、あの姿が消え失せていた。

言っただけだ、彼は私と剥がれないと。縋るべきものは僕だと。

主の意見を聞かなければならないと。

首の傷が疼く。指でなぞった。無意識に爪を立て、回を重ね自傷していた箇所。

彼の首にも同じような瑕疵が在る筈だ。

縊ろうとしても、結局はいつも力を緩め、手を離し、爪を立てて終わったその瘡が。

「……、なんで……」

先輩が、イントネーションの違う呟きを漏らした。

「何であんたが泣いとんねん……」

それから私は気付く。自らの頬を濡らしているものを。

……違う。これは、涙などではない。私は先輩のために泣いているのではない。

「何でや……なんで、アニキがあないな目え遭つとるのんにオレは……」

うな垂れる先輩を前に、私は瞳から溢れる体液を止める術など知らなかった。

ただ 顔を歪めている先輩を見据えることしか出来なかった。

相手に抉られ、削り取られていたのはどちらだったのか。

ディグノシス 08

「そつだ、それでいい。僕らを解しては 不可ない。」

Numberless “汝、還らん滅する事無く”

今日の俺は本当にツイていた。

日付が変わる時間帯 仲間と別れて、喧騒から外れた小道に差し掛かった時だ。

制服姿のガキが目の前を歩いていった。

何度も見かけたことのある制服だった。お嬢校っぽい千鳥格子のブリーツスカートでさあ、公立だから皆短くするだろ？なかなかオイイと思うんだよねー、などと制服マニアの知人が評していた学校だ。一丁前に着こなしてはいたが、目の前のガキはどうみても中坊にしか見えないナリだった。

足取りは覚束なかった。ガキが酒でも飲んだか、疲れているのか……その弱そうな体つきに勝機を覚えた。俺は今丁度、仲間内で撮ったデジカメラを持っている。

生徒手帳でも取り上げて脅せば、あんなガキ何も出来ないだろう。制服マニアはもとより、ロリ系マニアにも高く売れるかも知れない。いい金ヅルになること間違い無しだ。

思案から俺の行動は早かった。

気配を殺して、後ろから羽交い絞めにした。サバイバルナイフを取り出して見せつけ、思い切り低い声で脅した。

適当な公園を見つけて、暗がり投げ飛ばした。

手で口を押さえつけながら、制服のシャツをボタンごと引き裂いて剥ぎ取った。発展途上の僅かな膨らみが露になる。ガキのナリでも、ツンと上を向いていた頂は女そのもので、官能的に映った。見た途端、ガキに興味なかったはずの俺にもムクムクと欲求が膨らんだ。真っ白い靴を見ると踏み躪りたくなるのと同じだ。髪を引っ掴んで固定し、顔を寄せた。強引に口を押し広げ、ありったけの唾を注ぎ込む。逃げ惑う舌を口内で追いかけて、ザラザラした部分を執拗に刺激し、息が出来なくなつて苦しくなつたところすべて飲み

込ませた。

口を離すと、飲み込めない唾液が ガキの唇から一筋、糸のように細く垂れた。

「……ちがう」

虚ろな瞳で、ガキは呟いた。

生気のない声だったので 俺は一瞬まごついた。

「周ちゃんは、もっと酷かった」

荒々しく衣服を剥かれ、スカートを捲られて素肌を闇夜に晒しても、ガキは俺に焦点を合わせなかった。

「心の中で泣きながら、それでもかこの複製を貪ってた。

詰って、弄って、甚振って、躡りながら貪欲に喰らって……」

意味が解らないことを虚空に話しかける。……独白か。死ぬ間際の独り言か。

気力の失った兎に見えた。まな板の上の鯉ではなく鮪、もしくは関節がばらばらになった人形だ。

いつか見た映画の1シーンを唐突に思い出した。母親からの愛情に縋る機械の子供。倒れてもぶっ壊そうとしても、瞳孔の開いた目でママ、ママと口元を動かす刷り込みの人工知能。

……どうして、今そんなモノを連想してしまったのかは解らない。けれど、脳裏に移った途端、俺が次に感じたのは得体の知れない何かだった。

「ただどそのとき、かこは周ちゃんを陵辱してた。

弄られているのはかこの複製だったけど 心を侵しているのはかこの方だった」

淡々と喋るガキをどうにかして黙らせたかった。俺は膝をつきベルトをガチャガチャ弄る。痛い目に遭わせてやれば大人しくなる筈だ。力任せに下着を擦り下ろした。

「周ちゃんを自由にしてあげただけなの。

だって、かこは周ちゃんのいちばんの幼なじみで居たかったから。……かこは周ちゃんの望む存在にはなれなかったから。

周ちゃんが かこなんかにとらわれてほしくなくて、だけど 何かお礼がしたくて、

だから 複製を周ちゃんにあげたの」

黙れ！ 咄嗟に拳で頬を殴りつける。望む存在だの複製だの オカシなこと言ってるじゃねえよ！

「でも 周ちゃんはどこにもいない。

『彼』がすべてを消したから。周ちゃんが自分で『彼』に頼んだから。

喚いて、自暴自棄になって、自分をまわりから断ったから」

「彼」。

その単語を聞いた途端、強烈な印象が頭の中に迸った。俺の体内で、ザワザワ騒ぐ感覚があった。非現実の世界で、それだけが急速に色を持った現実のようだ。誰しもが畏怖する存在、欲望ともいえず人を変えさせる望みともいえず、奥底に潜んでもう一人格と成りえてしまう、飽くなき希求の塊。

自らの闇に潜み、いつでも自分を凌駕し覆い尽くしてしまう、その名は 誰もが知っていて誰も解せないまま消えていく。

「周ちゃん……ごめんね。痛くさせて、ごめんね。かこ、謝っても許してもらえないね」

ガキが目を閉じる。瞼から、するりと涙が零れ落ちた。

「こういう時、澄くんだったら何をするかしら」

背後から人の気配を感じて、俺は鶏のように振り返った。半月の月明かりの下で、女が俺らを見下ろしていた。長い巻き毛が初夏の夜の風に靡く。ブラックジーンズに細身のロングTシャツ。胸元に光っていたのは……男物のシルバーアクセサリ。猫の如き吊り目に見下ろされ、俺は暫し固まった。

「裁く？ 放る？ ……いいえ、滅するわね。こんな現場を見せ付けられたら」

女は抑揚の無い喋りでひとりごちる。

……滅する？

意味が解らない俺に、女は右手を宙に掲げる。

「『鍵』を掛けるわ。それが一番良いでしょう」

そうやって女がどこからか出した物は、鍵でもなんでもない、ただの

細長く尖った剣、そのものだった。

ざく　り

目の前の光景を見てしまった後で、俺の頭に武器名が浮かぶ。

見た目よりも重いその串刺しの剣を、女は躊躇することなくガキに突き刺したのだ。目の前でガキが、びくんと跳ねて其の場に沈む。生気が消えた。なんだ？　どうなってんだ、頭の回転が追いつかない俺は、瞳孔を目一杯開いて相手を見上げる。

やられる。次は俺だ。俺だ。

耳が劈くような恐怖の絶叫は、誰から洩れたものなのか。

瞳孔には、何を捉えていたのか。

「その恐怖を頭に叩き込みなさい。トラウマになろうが知ったことじゃないわ。……消えて」

「劣情を煽るのが好きみてエだな。其れが識った結果、得た物か？」

釦を外した白衣の裾が、外套の如く凧にたなびいていた。

月はない。都会でも夜空に星は浮かんでいるだろうが、

初夏の夜に浮かぶ恒星は極端に少なく、真黒な一面が頭上に広がるだけだった。

ざわざわと木々が揺れる。音に混じって、離れた場所に居る相手の声が響いてくる。

「ほざくなよ？ 意識も持たなかった片割れ如きが」

庇った身体が血を流す。紅い。人の仔らの私は、こんなにも昏く赫い血を流すのだ。

木の葉が公園の街燈の光を時折遮る。それに伴い、コンクリートの影も点滅を繰り返した。

嘲笑されるのには慣れたはずだ。

侮蔑に幾ばくかの憐憫と感興が入り混じっていると気付いたから、けれど何だろう。追い詰められている今は、自分が言われているわけではないのに、

身が震える。胸を抉られるような焦燥がある。

「一つ覚えとけ。誰が主か。約定はまだイきている」

やめて、と私は懇願する。

お願い。もしあなたに少しでも痛みが在るのなら。

連れて行かないで。受け入れてくれた存在を、無き物にしないで。

……奪わないで

ディグノシス 09

私の腕の中には、「彼」が居る。

彼は力を失った獣のように、ひゅうひゅうと息を吐いていた。

傷口から垂れた私の血が、彼の頬にかかる。こつてりとした粘液は緩やかな軌跡を描き 伝い落ちた。

僕らを解しては、不可ない。

あとき紡がれた一言を反芻していた。「彼」が残した<sup>こえ</sup>響だった。

ああ言って姿を消したのは、誰が狙われるか知っていたからか。

こつやって連れ戻しにくる存在を、知っていたからか。

けれど、これが棘というのならば、私は抜かない。

知ってしまったからだ。

痛みの方にあるものを。抉られた後に、彼によって埋め込まれたものを。

だから。……もう一度言って。主の希はと、訊ねて。

そうしたら私は、答えてしまえる。

私はあなたを締め上げて、苦痛に歪めて、それから 自分のものにしたいだけなのと。

「大丈夫」

突如後ろから靴音がして、顔を上げた。

「君の大事なひとはおれたちが守るから。もう、泣かなくていいよ。きっぱりとした物言いだっただ。」

ぼんやりとした明かりに、ラフな格好の少年が浮かび上がる。追いつめられてへたり込んだ 此方ではなく、遠くを真っ直ぐに見据えていた。

……誰？

「たいしたものね……それで欺いたつもりなの、ねえ」  
もう一人、奥から誰かが厳肅に呼び掛ける。落ち着いているが、怒りを押し含んだ声色。

少年と少女の二人は街燈下に視点を合わせていた。……距離にして10数メートル。

佇んでいたのは 蛍光灯のように目を刺激するほどの真白な外套。それから紫煙を燻らせ夜空に立ち昇らせている「月」が潜み 喪服のような衣装を身に纏った「彼女」が浮いている。

彼を連れ戻しに来たという男たちと、少年少女は対峙していた。

「あア？ 今頃お出ましか。遅かったな」

白衣の男は 少年と少女を見てせせら笑う。

知り合いなのか。……この少年少女も男と同じ、彼を連れ戻しに来たのではないのか。

目の前に現れた者らが対峙する中、私は彼をしつかりと抱いたまま 退かなかつた。

「よくもめけぬけと言ってくれるわ……解ってるのでしょうか」

大人びた少女が、男に向かって一歩前が出る。

「ミス・パーカー。貴方を滅する」

そして少年少女は木々のざわめきに呼応し、二手に分かれ、闇夜に紛れ、咆哮した。

unknown

僕が最初に意志を持った時、声に感化し気付いたのは「あれ」だった。

変哲もない「葦」に興味を抱いた。傍らに潜み、内面に入っては唆した。

僕の首を縊ろうとするあれの手には、いつでも混迷と躊躇があった。

過小評価し周りと同化できずに憤る自分、あるいは過大評価し周りを排他しようと企む自分、

醜悪な内面を隠蔽し、善き存在で在ると周囲に欺く自分、演じる自分、

外見から判断させることで優越感に浸る自分、内面を暴かれることを期待している自分、

世界に対する憤りは己に対する失望であり、感情は複雑に絡み合っていた。

だから僕はあれの首に瑕疵を与えた。いつも棘を刺した。雁字搦めになつている感情の鎖を、無理やりにも外していった。

動かない肢体を腐るほど抱いた。下卑た歓喜の声など要らなかった。

決つて傷を見せ付ける度、抵抗していた体は力を失くした。

誤魔化された本質に依存しては裏切られ、絶望に打ちひしがれ、結局は僕に縋る過程を視ていた。

壊して、愉しもうと思っていた。ただそれだけだった。

ディグノシス

ディグノシス

unknown

「名乗る価値なんてない……最初から、誰も……」  
生温かい鉄の臭いが流れている。

「相手が居るから……自分で価値を否定しても、此処に居られる……」  
震えながらも、細いながらも、僕を確りとかき抱く腕がある。

結局は僕に縋る脆弱な肢体の筈だ。殻を張り中心に触れさせまいとするのに、些細なきっかけを与えれば直ぐに内側から溶解し、崩壊し、自ら細胞を死滅させる有機体の筈だ。

それなのに、何故此れは、僕を庇おうとする？

朦朧とする意識の中、僕は罵った。解しては不可能だと突き放した筈が、何故此処まで来たのか。

「だからお願い、彼を連れていかないで……これ以上、私を裏切る存在を作らないで……！」

「ごめんね。無理だよ、それは。」

流れてくる第三者の声は酷く懐かしかった。

ボクたちはふたつでひとつ。だから、いつもこうしてなきやだめなんだ

瞼の裏に浮かべる過去の幻影と同じく、飽くまでも優しく少年のような喋り口調だった。

「何処に還るべきかは、彼がちゃんと知っている。だってボクらは、ずっと一緒だったのだから。」

還る場所とは何処だろう。僕を今かき抱いている此れの傍らの元だろうか。

それとも、僕が意志を持たざる前、融け合っていた身に戻ることだろうか。

「キミは誰かに赦されることを望んでいた。言うなれば断獄されることを望んでいた。」

「けど今キミは、彼の口も雪いでくれる誰かを求めている。」

……だってそうだよな？ 彼が今まで何をしてきたか、キミは知っていたはずだよな？」

僕は理解している。そう、この声は、融合の中で、常に貪欲に僕

を求めていた片割れ。

温かく受け入れつつも、意志を押さえつけ、主導を握っていた僕の半身。

知能と感情、理性と本能、それぞれが分け与えられ、僕は前者の役割である代わりに、後者を持たなかった。

些細なことから僕の生まれる筈のない意志は具現した。昇華したと同時に、欲求が芽生えた。

意志を持った僕がそれまでの記憶と知性を使い、初めて会話をしたのが、此の「葦」だった。

「『お前は他の子の所へ帰るがいい』。在りし日のボクらはそう言っただ。」

此れもまた帰るといい。誰しもがもう一人の自分を演じているように、気付かない振りをしたまま、他の個体の待つ日常へ戻るといい。

「そして次の一言で、ボクらはキミの内奥から消える。」

出会ったことなど消えてしまえばいい。すべて。すべて。……此れが、僕を解しようとする前に。

「あなたたちは彼の希を知ってるの」

だが、其れはきっぱりと言いつつ。徒の葦に過ぎない人間が、僕の片割れを前に言い分を撥ねた。

「私が呼ぶから。他の誰も呼ばなくていい、私が彼の名を呼ぶから僕をずっと放さない細い腕、押し付けられている感触。」

冷たくて、かたくて、厭うべきもの。

暖かくて、柔らかくて、いとおいしいもの。

どちらも偽りであり、真実であり、対にあり表裏一体となっているもの。

「彼が自分の意志で決めた名前を、ずっと呼び続けるから」

此れに呼び覚まされし使者の名は。

有機体の愉悦と嗚咽を知り得て、傍らに潜み、離れずに居た己の名は。

「 アンノウン……！」

……ああ そうか、解った。

僕は意志の意味を知らなかったのだ。

片割れに過ぎなかった僕が、意志を得て知ろうとしていたことは

総て 傍観だった。

葦を解するというのは名ばかりで、実際は眺めて分析していただけた。

導き出した己の意志を、意思表示して伝えることで、其れは初めて「希」と為り得るというのに。

口を開いて伝えればいい。

そうすれば、此れはその気丈な振りを止めて大人しくなるだろう。片割れの吐く科白を聞いて、すべて忘れてゆくだろう。

だから、僕は目を開き、再び融合され薄れ行く意識の中で、意志を、希を、伝えなければならぬ。

僕は。

『君』と、また、会いたい。

「だからみんなで行って見ない、公演」

「やっぱマキシ先輩拝まない。左垣センスが顧問だし、いろんな意味でレベル高いって」

たわいもない会話が続く。

テストも終わってすっかり元の席順に戻ったクラス内は、一時間目が終わった休み時間もとろとろしていた。

次の時間の教師が遅めに来ることを知っているので、大抵が席を移動して仲間内で喋っている。

話題に上ったのは、演劇部の定期公演に関することだった。回ってきた両面チラシを見ながら、皆は待ち合わせはどこでだとか、お金は掛かるのだとか、せせこましく話している。

私はもう 怯えない。

調和を瓦解する答えも、探していない。

どうでもいい話に一樣に頷き、一樣に返して、次を促し意見を言う。

同意しか望まれない意見を求められても、適当にあしらい冗長な話を膨らませる。

穏やかで代わり映えのしない世界をそのまま見続けているのだ。

「……ね、そっぴい演劇部といえは 九茂さん、入院だっけ？」

座り主の居ない席を見やってから、次第にその話題に移り変わった。

「あのウワサ本当なのかなー。通り魔にやられたとかって……」

ディグノシス 10 名乗る価値が生まれるのは、己を否定しても居られるわけは

あの木々が騒ぐ夜のことを覚えている。

無我夢中で「彼」の元へ駆け寄った。あの時のことを覚えている。彼を連れ戻しに来た白衣の男。煙草をふかす「月」。男の傍らに浮く「彼女」

それらを前にして震えるだけの私を救ってくれたのは、名も知らぬ少年と少女だった。

すべてが終わった後、詳しくは語れないけれど、と前置きした上で、少女は云った。

「あなたに会って欲しい人がいる。理由はどうあれ、わたしたちが間違つて『斬つて』しまった子よ。

口にしていたのは望みの対象。あなたのことなの」。  
凜と気高い少女だった。同じくらいに見えたけれど、もしかしたら私より年上だったのかもしれない。

あなたたちは……「なに」。

私の問いに、少年は困った顔をした。分別ある大人が諭す目をしていた。

ゆつたりと構えているが、飄々としていて掴み所がない。人は柳のようだと形容するのだろう。

「おれも知りたいよ。なんでこんなチカラがあるのか、自分が何なのか」

瞳に翳りが映ったと思ったのは一瞬だった。

此方がどきりとしてしまうような。弾けた笑みをして、少年は腰をついている私に手を差し伸べた。

「でも、君のあの一言で目が醒めた。……ありがとう」

何処かでこんなぱつと弾ける笑顔を見たことがあった。よく知った顔。周りとの調和を第一に考える者。

相手に必ず逃げ道を作り、後追いもせず深追いもしない。

私はこのひとに似た誰かを、知っているはずだった。

「周ちゃん、これこれ〜！ お弁当忘れてったでしょー？」

その時 特徴のある可愛らしい声が耳に入って、私は回想から戻るべく顔を上げた。

開いたドアから弁当箱を振りかざし、クラスの注目もものともせず声を張り上げている女子生徒が目映る。

ギンガムチエックのクロスで包まれたお弁当は、さながらその子が作ったかに見えた。

実際は 恐らく近所のよしみで、忘れてきた弁当を届けにきたというところだろう。

受け取って戻ってきた関君を見て、周辺に屯っていた数名のうちある男子生徒が小突いていた。

「シユウタちゃ〜ん、愛妻弁当 奥さんに届けさせるんですか〜？」  
「要らないって言うてんのに母親が作るんだよ。食費ぐらいオレでも出せるのに」

「…………… 負けた……………」

自分から からかっておいて、自分でショックを受けて凹んでいた。

「おーおー、もうすっかり公認だなあ 関っちとその幼なじみちゃん」

離れた場所で見っていた 此方の集まりの一人が感想を述べる。

「イチハラも面白いよねー。あんたもテスト中飽きなかったでしょ、イジれて」

話題を振られて、とりあえず笑っておいた。

物言わぬ前列の机をちらりと見た。 演劇部公演が間近になった矢先、あの演劇部員は入院していた。

一年前の春、その子と交わしたやりとりがある。

部活の用具を取りに体育館に出向いた時、裏方の準備をしていた子と偶然会い、話をしたのだ。

どんな話をしたか覚えていない。学校に入りたてで、よくも解ら

ないで喋っていたのだから。

ただ相手の頬が少し汚れていたのを見かねて、指でなぞったのは記憶にある。

相手は戸惑っていた。けれど、その純朴な顔が、花咲いたように笑ってくれた。

だから、「私の為」という名目で数々の行為に及んだとは……まだ理解しきれていないけれど。

「で、どうする嘉穂？ あんたも行く？」

思いを巡らせていると、集まりの一人が無邪気に定期公演の鑑賞参加の意志を聞いてきた。

首を横に振りながら、私は用があるからとやんわり断る。

放課後、練習を終えたら、私はあの先輩を探して話を持ちかけよう。

嗣永先輩もお兄さんのお見舞いに行つて欲しい。そうしたら、私も一人で行ける気がする。

あの子の取った行動はどうあれ、私を思ってくれていた子の所に見舞いに行ける。

私は「彼」の残した軌跡を、知らなければ不可なかつた。

知り合いに似ている気がした と「月」は言う。

けれど 似ていたのは表面に見る明朗さで、本質は全く似ていない とも 月は言う。

「偽善や詭弁つてのがオレは嫌いじゃないすよ。暴く愉しみがあるじゃないっすか」

紫煙の糸が 真夜中の工事現場の金網から、すうと昇っていった。火の粉が花火のように散って消えていく。私は金網の反対側からそれを眺め、雨が上がった後の夜風を受けた。

「抽象論や哲学だつて嫌いじゃない。嘘を堂々と正当化出来るじゃないっすか」

卑猥な女性の絵がプリントされている紫色の背中が、やけに目に入った。

緑色の箱から取り出される銘柄の煙草も、腰に巻かれたチェーンも、饒舌なカタリも、ローティーンの学生にはそぐわない。

「真理は詭弁で塗り固められ、嘘は崩され核に近付く。……永劫繰り返すんすよ、ヒトの希が有る限りね」

ディグノシス 11 LAST LUST TRUST

## ディグノシス

Dig out, Dig out facts from  
 arker.  
 Dig deep, They dig deep into  
 the ground.  
 His remark must be a dig at m  
 e.

手元にあるカードを再度見る。あの時 手渡された代物だった。市販の招待状ほどの大きさの紙に印字されていたのは、言葉遊びのような数行の英文。

「ああ、ソレを手渡した理由？ 『先生』に朋生クンの大切さつてものを痛感してほしかっただけっすよ。

オレの悦びは先生とともにあるんで。ちょこつと困らせてやりたいオトメゴコロ？」

金網に背中を預けて、軽口を叩いている。

バックプリントの裸の女性の絵が 全身に網を纏わりつかせているように見えた。

「ま、ソチラさんに興味があつたつてもありますけど」

いわく、此処はオネエサマを呼び出すにはお誂え向きの場所なのだという。

わざわざ金網を上って入ったのだろうか 地層工事現場の中で煙草をふかしている月を見つけ出すのは簡単だった。

「どうやったらそういうペルソナが被れんすか。明朗快活で人望も厚い健全スポーツ少女さん」

火の粉が真夜中に光り、一瞬で溶けて消えていく。

「教えて欲しいんすよ。『どうやったら ヒトならざるものと呼び寄せて、籠絡出来るんですか』ってね」

神経を逆撫でされると解っていた。挑発に乗る意味もないが、眉をひそめずにはいられなかった。

……いいや私は呼び寄せたわけではない。彼の声に感化したのが私だったのだ。

此方が返事をしないことを予測していたのだろう。何も言わないでも声は聞こえてきた。

「 ついでにオレも籠絡させてあげましようか？」

かしゃん、と金網が揺らいた。相手が振り返り、指を引っ掛けた

まま顔を近づけていたからだだった。

突然の言葉に反応が遅くなる。金網の向こうの顔は、勝ち誇った笑みを浮かべていた。

「ヒトハダ、そろそろ恋しいでしょ。オレとの利害は完全に一致してると思っんすけど」

もし金網越しでないのなら、背伸びにしか見えないその横面を叩いてもよかった。

扱いに慣れているのかおちよくっているのか 年下なのに受け流すその余裕が気に入らなかつた。

違う。誰かを彷彿とさせるからだ。

年下の外観で、威厳と余裕を見せ付ける誰かの面影が、重なってしまうからだ。

似ているはずがない。そう思いつつも、心のどこかで疼く自分が居る。

「赦してくれて、裏切らない存在 ってのが欲しかったんじゃあないですか……？」

面と向かって不純物を吐き出された。身体にまとわりついてきたのは、重厚で深みのあるスモーク。

目を瞑る。赦されることを望んでいた自分。断獄されることを望んでいた自分。

そして、「彼」の行動のすべてを、雪いでくれる存在を切望した自分。

……「僕は、君とまた会いたい。」

思い出す。あの夜、彼が此方を『君』と呼び、望みを伝えてきたあの言葉を。

私は それが彼なりの饒別の言葉だったと理解している。

彼は帰ったのだ。還るべき処へ。戻るべき者の懐へ。

他の仔らの待つ場所へと戻り、内面の蓋を塞いでしまった今、私

の中には 虚無しかない。

いつかまた この虚無も穢れた膿へ変わるだろうか。  
生き続ける限り、あの暗くて淀んだ思考を内面から滲ませるよう  
になるのだろうか。

壁を作り、人を欺き、他人とどこかで線を引くようになるうとも、  
あるいは衝動を抑え切れなくて何らかの行動に出ることになるう  
とも、恐らく二度と「彼」の声を聞くことは出来ないというのに。

「さあ、言ってくださいよ。タテマエ、本音、詭弁や抽象論でもい  
い。

オレが決って 取り繕って 何もかも『忘れなく』しますか  
ら

それでも私は呼び続ける。

誰かと過ごし、誰かに抱かれ、誰かと共に果てても、彼の名前を  
呼び続ける。

アンノウン。『名乗る価値もないもの』。

それは誰しもが存在を解し、誰しもが最後まで呼べずに居た矛盾  
の名前。

私に存在価値を与え また私が名乗る価値を与えた人非ざる誰何  
の 希。

O r a t h e r t h a n n u m b e r l e s s

辟易していた。

茶化された問い掛けに優しく返しながら、舌舐めずりしている自分。

屈託なく話しかけてくる彼女たちに向かって、一人ずつ査定している獣に。

愛しい。彼女たちは、とても愛らしい。

既に大人だと勘違いをしている少女。他と差別化しようと背伸びをする少女。

自分に魅力がないと思い込み 地味で控えめに生きている少女。

実らない恋に奔走する少女。此方を安心しきって、温かい家庭の話を始めると少女。

声を掛け、一度体温を重ねるだけで仕草は大きく変わる。

蛹から蝶へ変わるが如く、変貌を遂げていく様を何度観たことだろう。

だからこそ 胸の内が苦しくなる。愛しいゆえに。壊してしまいたくなるがゆえに。

……これは彼女たちに対する思慕なのか憧憬なのか己の煩惱なのか欲情なのか

berles  
s  
D e i g n o s i s  
O r a t h e r t h a n n u m

私が出会ったその男は、出で立ちからして奇妙だった。暗い暖色系の照明の下、白い外套を羽織り、カウンターに座っていた先客。

場にそぐわぬ格好に 此方が凝視していると、向こうから話しかけてきたのだ。

「ああ、コレか？ 白衣だよ。帰りで急いでたんでな」  
返答に窮してしまった。

白い外套に見えたのは白衣だった。場違いな格好であるのに、誰も気に留めなかつたらしい。

男いわく、『仕事』を終えてそのまま着てきたのだという。

恐らくは医学系、もしくは研究に携わる人間なのだろう。それにして普通、白衣などでは来るまい。

：数秒の嫌な沈黙を、店の奥から起こった拍手が救ってくれたことに感謝した。

ささやかな拍手から一呼吸置いて、流れるような調べが鍵盤から咲く。

ここより離れたラウンジの壇上で、スポットライトを浴びながら、ピアノの卵が弾いていた。

軽やかな右手のメロディに、重厚な左手の伴奏 客受けしそうな、よく耳にする曲だ。

そういえば同僚の数学教師はこんな洗練された音楽が好きだった。  
「meiner Seelen Wonne」

手持ちのジントニックを一口呑んで、男が何か呟いた。英語、いや、独逸語。

「バッハの“主よ、人の望みの喜びよ”ねエ。ウラを返しゃあヒトの望みなんて全部欲望だつてのに」

氷入りのグラスを回しつつ、軽口を叩く。透き通った音が響いた。  
「けど 生きてこれてんのは…その欲望が『意思』になるからかもな」

男の 眼鏡の奥の釣り目が、曲がる。

何の考えもなしに言ったのだらう。一見して、この奇怪な男が皮肉や抽象を言うとは思えない。

苦笑いした。どうしてか胸が痛んだ。

目の前の白衣が聖職者のように映ったからか。

欲望　白衣を着ても軽そうに見える相手に、かの意味の深さを知らしめてやりたかったからか。

それとも　二つと光る釣り目の双眸が、眼鏡を通して、強く射抜いているように思えたからか。

洗いざらい言ってしまったら、どんなにか楽だらう。

自分の望みは、生徒の幸せ。彼女たちを導くこと。

私を信頼し、演劇のことや悩みを打ち明けてくれる生徒の指針となり、手助けすること。

それなのに、気が付くと別の扉を開けてしまっている自分がいるのだ。

この子は、果てる時どんな言葉を紡ぐのか。

この子は、無理やりに貫いたらどんな風に泣き叫ぶのか。

四六時中、そんな思考が渦巻き、舐め回すように見てしまう。

欲望と望みを　都合の良いように置き換えている。

穢れている。まったく矮小で賤しい畜生だ。

「だから人外如きが……意思を持つ意味なんざ無エんだよ」

男の声で場に引き寄せられた。

…鋭い物言いが、此方の耳を刺してきたと思ったのだが。

「それはそうと」

いきなり声のトーンを落とすと、男は私を上から下までジロジロ観察し出した。

「そんな力オしてつと、どうだかな」

なんのことかと目を瞬かせてしまう。男は悪びれずに付け足した。

「今のあなた、悪魔にでも憑かれちまいそう　そそられる力オしてたからよ」

思わず羞恥心からかとなった。此方が抱える「人畜無害顔・童

顔」のコンプレックスなどお構いなしだ。こういう場所にはやはりそれなりの嗜好の持ち主が現れるのだろうか

「冗談。オレの好みは、タフな女と か弱い少年なもんで」

対処に困っている、男はぱつと明るく点つたような顔で、笑い飛ばす。

「湿っぽいツラは止めとけよ。 こういった酒の席は 何もかも忘れて、ただ飲むのがいい」

『お前は他の子の所へ帰るがいい。そして、私等は何もかも忘れようじゃないか。』

「……？」

訝しむ男の顔があった。

どうやら私は、自分の頭の中に浮かんだ一節を ぼそぼそ声に出してしまっていたらしい。

酒を飲むと思考と口が直結になってしまつのは酔つた証拠だ。

気恥ずかしくなりながら 私は、悪魔 と聞いて海外文学の一節を思い出した、と弁明する。

善悪の只中に居る少年に囁く声。 蠅の王と名乗つた異質の存在は、会話したことは忘れろといって少年を送り出す。

B a e l z e b u t . 悪魔の中でも王に近い悪魔。

簡潔に説明すると、男はこんな感想を漏らした。

「バアル・ゼブル、ベルゼブブの別名つてワケか。なるほど、悪魔は 唆す人外、ね」

白衣だけ着てあつて、博識な面もあるらしい。話に乗ってきたのは意外だった。

「そっいや 神話だっけ、人間でも悪魔を逆に引き込んだっつーハナシを前にどっかで聞いたな。」

ゲームのラスボスだか召喚獣みたいな名前だ。 ああ、響きが良かったけど もう忘れちまつた」

男はまたグラスを回す。氷の解ける 涼やかな音色が染み渡る。  
「ま、酒の席には 無えつつつてんだろ。 名乗る価値も、独白  
する意味もな」

此方を見透かしているような いないような、なんとも奇妙な言  
い分だった。

目の前の白衣が目映る。咎人を浄化するような、その真っ白い  
蛍光塗料の、羽。

薄暗い照明に慣れた時、ふと男の額についた斑点を見つけた。

終わりを予感させる夕闇のように、赤黒く、滴ってきそうな、  
色彩。

だが此方は其れに敢えて触れなかった。

汗でも拭き取るかのような仕草をした男の手の甲に、其れは乾い  
た砂となって、ぱらぱらと 散っていった。

……その名は決して語られないことがない。

断続的に述べられるのは、瑣末で一端にあたる物語。

嫌味の通告、威厳ある死、無価値な尊厳、皮肉めいた虚無、探し  
当てたのは限り無く続くつまらないもの。

D i g N o t i c e / D i e - g n o s i s .

D i g F o r i n f i n i t y N o t h i n g n e s s .

D i g n i f y N o t h i n g n e s s .

存在理由の模索は続き、憧憬は果てる事無く、破棄と追憶と解放  
を希む誰何の為に其れは蠢く。

そう 解しては不可ない。

ディグノシス 了

Appendix and Afterword

登場人物一覧

・「私」…… 01、11、unknown  
 ・「彼」…… 01、10、numberless、unk  
 nown

・「オレ」(関 周那)…… “甘く広がるその名は妄想”

・「自分」(九茂 響子)…… 04、“君に誓う戯言と囁言”

・「ぼく」(辻 清隆)…… “常識で測れないぼくは子供”

・「俺」(嗣永 鷹侍)…… “汝、還らん滅する事無く”

・「月」(阿佐ヶ谷 朋生)…… “常識で測れないぼくは子供”、

unknown、11

・男子生徒(市原 重)…… 05、10

・後輩(布施 羽苗江)…… 05

・先輩(嗣永 佐鳩)…… 07、08

・少年(市原 澄)…… 09、10、unknown

・女、少女(遊佐 凜呼)…… 08、10、“汝、還らん滅す

る事無く”、unknown

・幼なじみ、ガキ(本見 佳子)…… 10、“甘く広がるその名

は妄想”、“汝、還らん滅する事無く”

・女子(市原 志珠)…… “常識で測れないぼくは子供”

・白衣の男(館村 央葉)…… 09、unknown、0

rather than numberless

・「彼女」…… 09、unknown

・「私」…… 0 rather than numberless

s、“ ”

時系列

0 rather than numberless

ディグノシス

08) (6/4)

07前半) (6/4)

07後半) (6/4)

“ 汝、還らん滅する事無く ” (6/2)

06) (6/1)

05) (6/1)

“ 君に誓う戯言と囂言 ” 前半) (5/31)

04後半) (5/30)

“ 君に誓う戯言と囂言 ” 後半) (5/30)

04前半) (5/30)

“ 甘く広がるその名は妄想 ” (5/29)

03) (5/28)

“ 常識で測れないぼくは子供 ” (5/27)

01

02

# ディグノシス

1	1	1	u	0
1	0	0	n	9
		回想部分	k	
			n	
			o	
			w	
			n	

## Appendix and Afterword (後書き)

衝動と。希と。欲望と。

この世界は、あまりに負の感情が入り混じり過ぎている。

心に秘めた欲望と、負の感情を、抑えることができなかった弱い者たち。

どんな形であれ、どんな決意の仕方であれ、彼ら彼女らにも光はあると信じたい。

断片的で不可解な話にも関わらず、この作品に目を通してくださった方に感謝を込めて。

ありがとうございます。

2007/9/30 沙堂 瑠々亞

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8041a/>

---

ディグノシス

2009年4月23日02時41分発行